

時、秋にして積雨霽（晴）れ…（中略）燈火<sup>ようか</sup>稍<sup>べ</sup>く親<sup>かんべん</sup>しむ可<sup>けんじよ</sup>く 簡編、卷舒す可し。…

— 韓愈「符読書城南」 —

秋の夜の燈火の下、自ら静かな思いを誘い書物を広げる。  
ゆったりと充実した時間の流れる中、深まる秋を想う。

ふるさとの風  
～霜月～

## 文庫礼讃

— 神都の図書館 Fumikura から Library へ —

図書館は人間の長い歴史と共に常に知的な創造の場、空間でありつづけたといえる。  
日本で「図書館」の名称が使われたのは明治に入ってからである。それまでは「文庫」がその役割を果たしてきた。

神都伊勢において文庫の沿革は神宮における文書収蔵の歴史そのものと重なる。  
古来両宮域内には文殿や神庫と呼ばれる記録文書を収めるための施設が置かれ、祠官たちの研究や検索の用に供されていた。しかしこれらの「文殿」や「神庫」は広く一般に公開されたものではなかったのである。

豊宮崎文庫は慶安元年（1648）外宮の東隣宮崎の地（現在の岡本3丁目）に外宮祠官出口延佳らの提唱に同志70人が賛同、出資して創設された。

文庫設立の目的について延佳は自署「伊勢太神宮神異記」の中で次のように述べている。

「太神宮の御為、神書、古記、和漢乃書籍をあつめ、万代に残し且は所の人にも学問をすすめんがためなり」  
延佳らは外宮祠官や子弟等、志学の者が利用でき学問所にもなる文庫の設立を図ったのである。  
文庫設立の熱意に応えて多くの学者文人から書籍の献納が相次ぎ蔵書は充実したものになっていった。  
又、多くの碩学の学者たちも文庫を訪れ学問所としての文庫のために教壇に立ったり講演会が行われていた。  
その中には貝原益軒、室鳩巢、伊藤東涯、大塩平八郎などの名前があったという。

豊宮崎文庫より遅れることおよそ40年貞享3年（1686）宇治会合年寄らが内宮に文庫を設立する計画を立てた。  
時の山田奉行岡部駿河守勝重の支援を受け翌年には丸山の地に「内宮文庫」を設立したが、土地が高湿で図書保管に不適切なため、元禄3年（1690）に隣接する林崎に移転。「林崎文庫」と改称された。

しかし百年も経たないうちに荒廢の一途をたどってしまう。その再興に献身したのが内宮権禰宜蓬萊（荒木田）久賢であった。彼は谷川士清の娘婿であり古くから親交のあった本居宣長も援助を惜しまなかったという。  
宣長が著した「林崎のふみくらの詞」…石碑に刻せられたその文章からは今も尚林崎文庫の往時を偲ぶことができる。

豊宮崎と林崎の両文庫は図書館であるとともに神職子弟の教育の機関であった。  
さらには碩学大儒との交流を通じて発展し、神都伊勢と京都、大阪、江戸などの文化的先進地を結ぶ役割を果たしてきた。

御幸道路から黒門（御師福島御塩焼太夫邸門）をくぐり石畳の坂道をのぼると大正ロマン漂う和洋折衷の建造物が姿をみせる。神道学最大の宝庫として知られる神宮文庫である。

明治4年（1871）の神宮の組織制度改正にともない豊宮崎と林崎の両文庫をはじめ文殿、神庫等の蔵書を合わせて新設。

明治40年（1907）内宮近くに書庫及び閲覧室が建てられ蔵書数は5万冊に及んだ。  
その後大正14年（1926）に現在の地倉田山に移転している。

文庫から図書館へという呼称の変化は書物の専有から共有へという流れを背景にしている。  
図書館は時代の変化に合わせて自ら変革して進化していかななくてはならない。しかし書物が古くから受け継がれてきた歴史も大切である。過去、現在、未来の人々と書物を共有する事も図書館の使命ではないだろうか。

平成4年10月秋晴れ…、抜けるような青空のもと新図書館が開館しました。

豊宮崎文庫跡に隣接した旧図書館から移転し今年で20周年、

先人たちの知識の宝庫は時空を超え、この地で今も生きつづけています。